様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００３７

研究課題名（和文）明治期日本における「共和主義」概念の解読―特にその英米思想史的由来をめぐって

研究課題名（英文）Analyzing Meanings and Usages of Republicanism in Meiji Japan: Especially Focusing on Their Anglo-American Roots

研究代表者
柴田　真希都（SHIBATA, Makito）

国際基督教大学・付属研究所・元・特別研究員PD

研究者番号：７０７２２９１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、明治期の日本において「共和主義（republicanism）」やそれに類する語を積極的な概念として用いた事例を調査し、その表象がもった社会共同体構想の歴史的意義や可能性を考察したものである。その特徴は、「共和主義」周辺の概念が、明治日本でどのように理解されたのか、その意味範囲を実証的に確かめるという方法にあり、近代日本における「共和主義」の受容史の一部を跡づけたことにある。具体的には、中江兆民、内村鑑三、木下尚江などといった面々を中心に、当時の国家体制と法律の範囲内で用いられた「共和主義」をめぐる議論を整理し、その用法の背後に控える思想史的ルーツとの関連を考証した。

研究成果の概要（英文）：　In this research, I investigated the examples that in Meiji Japan some thinkers used the word “republicanism” and the words similar to it as a positive concept. In addition, I studied the historic significance and possibilities of the social community design that those representations had. There is the characteristic for the method to demonstrate the range of the meaning of the word substantially: how the concept of the “republicanism" was understood in Meiji Japan and how the history of reception of its concept can be traced in modern Japan. Specifically, led by all such as Chomin Nakae, Kanzou Uchimura, Naoe Kinoshita, I arranged some arguments over "republicanism" used within the national polity and laws in those days and studied historical evidences of the connection with the Anglo-American origins in their thoughts.

研究分野：日本思想史

キーワード：共和主義　明治期　キリスト教　共同体　内村鑑三　南原繁　ニーバー　福沢諭吉

１．研究開始当初の背景

本研究は、以下に述べる二つの研究史的成果が合流する地点を見据えて、確固とした課題意識として結実してきたという経緯がある。

一つ目はここ 40 年ほど政治・社会思想史分野において活発な、西洋思想史を貫く「共和主義」をめぐる一連の研究潮流である。それは J.G.A.ポーコックの *The Machiavellian Moment*（1975）を画期として、今に至るまで議論活発な分野であり、近年では、ポスト・マルクス主義時代の liberalism と communitarianism の対決構図を相対化するような公共思想としても「共和主義」の価値と高い潜在性が問い直されてきた。日本においても、この流れに呼応するように、ここ 20 年ほどで、英米やフランスの「共和主義」や「共和制」とくに近代のそれの展開をめぐる論集や著作がいくつか出版されている（田中秀夫『共和主義と啓蒙』1998 年、田中・山脇編『共和主義の思想空間』2006 年、佐伯・松原編『共和主義ルネサンス』2007 年など）。

これら日本における共和主義をめぐる論集や著作は大きく総括するならば、西欧政治思想史における「共和主義」概念の内実と多様性を明らかにするといった専門的課題を担ったものである。それゆえ当然ともいえるが、そこに西欧圏外あるいは日本近代における「共和主義」なる語の展開を跡づける作業は未だ見られなかった。本研究課題は、これら西洋思想史的な概念である「共和主義」の概念史研究の充実を、日本近代の「共和主義」をめぐる実態を解読するための、理論的枠組みや解析の道具だてとして応用できないか、という問題関心に導かれたものである。

本研究が立脚する二つ目の関心領域は、研究代表者が従来そこを研究の持ち場としてきた、近代日本思想史分野である。この分野における「共和主義」をめぐる議論の主流は、戦後一貫して、君主制　天皇制に対峙する意味での「共和主義」の実質を充たすような思想・言動を発掘していこう、という問題関心によるものであった。その代表的な研究には、小西四郎「自由民権運動と共和制論・天皇論」（「日本歴史」100 号、1956 年）、家永三郎「日本における共和主義の伝統」（『思想』410 号、1958 年）、河野健二「日本における共和主義の原型」（『展望』231 号、1978 年）などを挙げることが共通了解となろう。これらの研究に加え、小品ながら重要な着眼点をもつ、海老沢有道「レプビリカ（共和制）のこと」（『日本歴史』136 号、1959 年 10 月）も挙げねばならない。なぜなら海老沢論稿では、キリシタン時代において日本人が初めて「共和国」（Res Publica）の実態を見学し（天正遣欧使節）、また国内の教育機関（セミナリオ）においてもそのことが教えられていた、とする見通しをもつような、当該概念の受容史について考察されているからである。研究代表者の本研究への着想は、この海老沢氏の関心や視点に負うところも大きい。

２．研究の目的

本研究の目的は（１）明治日本、特に不敬罪が適用され始めた明治中後期以後（明治 15～40 年頃を想定）のテキストにおいて「共和主義」（republicanism）やその周辺にある概念が、いかなる意味内容を伴って表象されてきたのか、それを文脈に即して明らかにし、天皇制国体＝大日本帝国憲法下において提唱し、伝達可能であった「共和主義」をめぐる言説周辺の諸活動を整理することである。（２）具体的には上記で考察の対象になる明治期「共和主義」思想の由来や、その思想を支える底流的な思想文脈を浮き彫りにすることが挙げられる。その際、ポーコックや Q・スキナー（*Liberty before Liberalism, 1998*）、P・N・ペティット（*Republicanism: A Theory of Freedom and Government, 1997*）らによる、西洋共和主義研究の成果を生かしながら、先行する時代あるいは同時代の欧米共和主義の気風と、明治日本における特定の「共和主義」論とがどう相関するものであるのかを考慮している。さしあたり、明治日本において広く受容され、人物によってはその思想形成に多大な貢献を果たしたところの、17 世紀クロムウェルのピューリタン革命から 19 世紀アメリカ・ルネサンス期（エマソン、ヘンリー・ソロー、ホーソン、ホイットマンら）へと流れる、英米系の共和主義思想の展開に注目し、それが、明治期の、そして明治以後の「共和主義」周辺の議論に果たした影響関係を確かめることを本課題の目的に設定した。

３．研究の方法

共和主義（republicanism）を論じたことが判明している 3 人の思想家、中江兆民、内村鑑三、木下尚江を取り上げ、彼らにおける「共和主義」論と、その応用とみられる思想言論活動の展開を跡付けることから開始した。その際、従来、共和主義という文脈では全く触れられてこなかった内村鑑三の共和主義論を整理し、彼の日清戦争以後、明治末に至る歩みを、その独特の共和主義的志向から再解釈することを試みた。従来、多様な問題圏においてよく語られてきた内村を、中江から木下へと至る共和主義者の系譜の中に、具体的には、中江と木下の間に置くべき人物として位置づけようとするのが本研究の一つの見通しとなった。英文による発表のためかあまり知られていないことであるが、内村は『万朝報』にて「共和主義の精神」と題する重要な文章を発表している（明治 30 年）。この時期の内村における自由民権運動の遺産の継承や、その後の社会民主主義との連帯性を明らかにすることによって、内村よりやや以前に活動した中江とやや後に活動した

木下の、それぞれの「共和主義」的傾向との思想的接触点を探ることが可能となった。内村の友人や愛読者の中には、政治化して民党の活動に参加するものや、社会主義運動に参加する青年たちが多数現れたことから、彼を基点として、中江兆民や木下尚江の「共和主義」のそれぞれの特色を比較的にあぶりだしていく、ということが次に待ち構えている作業となった。中江においては、内村と同じく、政治以前の事柄としての、内心の自由の確立（リベルテ・モラール）を最優先課題とする「自治の国」（Res Publica）周辺の議論が問題化された。また、木下は自らを「共和主義者」であったと分析した人物であり、その人類平等志向から反天皇制論者として名高いが、クロムウェルの革命を衝撃として受けとめたという点で、不敬事件以後の内村と通じるものがあった。各人の公にした単行本や雑誌論文のみならず、私的な日記、書簡の類や他者による伝聞の記事をも渉猟しつつ、その実態を文献批判によってじっくりと組み立てていくことが本研究の手順となった。

続いて、三者とその周辺の共和主義思想について、西洋政治思想史における共和主義研究によって提出されたいくつかの観点によって、その特徴を分析することが目指された。西洋共和主義研究から導き出された「共和主義」の諸要素を基準として、近代日本において発生した共和主義をめぐる議論とその傾向性、それが意味する時代思想との関わりなどを解釈することも研究方法に含まれた。

こうした実証研究と並行して、近代日本における「共和主義的」な思想の涵養に大きな影響を与えたと推測される、17 世紀クロムウェルの革命からアメリカ独立革命を経てリンカーンへと至るような、アングロ・アメリカン共和主義の系譜における思想的諸要素の把握に努めた。それにより、英米に流れる共和主義のエートスと、中江・内村・木下やその周辺の共和主義的な議論が、いかに共通し、また相違するのかを比較思想研究によって明らかにすることが目指された。

４．研究成果

所記の研究課題に対して二つの方向から研究を進めた。一つは近代日本の具体的な共和主義論の発掘であり、もう一つは西欧社会思想史において近代英米文脈に展開された共和主義の理論的探究である。

前者に関しては中江兆民、内村鑑三、木下尚江に着目し、彼らにおける「共和主義」論と、その応用とみられる思想言論活動の展開を跡付けることを行った。その際、中心としては内村鑑三の共和主義論を改めて整理し、彼の明治期の社会・政治思想の要諦を、その独特の共和主義的志向から再解釈することを試みた。その成果は講演として、またその関連論文として公表された。中江、内村、木下らに加え、福沢諭吉や新島襄といった明治初期から活動する知識人にも共和主義的要素を見出す作業を行った。

一方、後者に関しては、英語圏で近年発表された共和主義関連の文献解釈を行った。*Philip Pettit* の *On the people's terms : a republican theory and model of democracy*（*2012*）、*Michael P. Winship* の *Godly republicanism : puritans, pilgrims, and a city on a hill*（*2012*）などである。さらに原典講読の重要性を鑑み、研究会を開いてジョン・ロックの著作に取り組んだ。これはイギリス 17 世紀に提出された commonwealth（共和国）の概念、政府の保護義務の対象となる property の概念、あるいは革命権の問題などを考慮し、それらを近代日本の共和主義を理解する際の参照枠として適用することを念頭に置いた作業であった。そこに西欧共同体理論における近代英米文脈に展開された「個人と社会」の関係をめぐる理論的探究が続いた。

近代日本の共和主義的思想を発掘する作業は明治期以後、内村鑑三から南原繁につながる流れに着目し、彼らにおける「共和主義」あるいは「共同体主義」論と、その一展開ともみられる自由主義批判の様相を跡付けることへと展開した。その際、中心としては南原繁の共同体論を改めて整理し、彼の政治思想や宗教論の要諦を、その独特の共和主義的志向から再解釈することを試みた。その成果は各種学会報告や関連論文として公表された。その際、比較対象として、一方に福沢諭吉の政治社会論が参照され、また他方に新島襄から徳富蘇峰につながる「自由政治」論の流れを捉えつつ、明治初期から大正・昭和期につながる共和主義的要素を見出す作業を行った。

一方、英米圏の 20 世紀の政治社会論の著作にも取り組んだ。それは日本の共和主義思想にもっとも影響を与えたと思われる 19 世紀以後のアメリカの「個人と共同性」をめぐる議論の把握につながるからであった。これについては、人間学という観点から政治共同体論にまで議論を及ばせている R.ニーバーの諸著作を研究し、彼の周辺で活動したキリスト教社会倫理学のテキストを参照しつつ行われた。その際、王政批判という点で、預言者的宗教（prophetic religion）のアメリカ的流れの重要性を発見できたことは一つの研究上の画期であった。

また、共和主義に隣接する社会民主主義との関わりでは、19 世紀イギリスにおける文学・芸術の革新を含めた労働運動の先導者ウィリアム・モリスに注目し、その近代日本における受容過程において、共和主義的要素が多様かつ独自の形で展開されたことを探究した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

（査読あり）
１）「内村鑑三における福澤批判と福澤評価―その総合的理解に向けて―」『近代日本研究』32 巻、慶應義塾福沢研究センター、2016 年、pp.67-103

２）「知識人の社会事業としての聖書研究―内村鑑三の職責意識と普遍主義をめぐって―」『宗教研究』381 号、2014 年、pp.25-50

３）「明治期・内村鑑三における共和主義の展開」『公共研究』第 10 巻第 1 号、千葉大学公共学会、2014 年、pp.131-179

（査読なし）
１）「南原繁における福沢諭吉―宗教固有の意義をめぐる哲学批判の射程―」『アジア・キリスト教・多元性』「アジア・キリスト教・多元性」研究会、第 15 号、2017 年、pp.63-82

２）「内村鑑三における社会改革の論理と倫理―明治後半期を中心に」『内村鑑三研究』49 号、教文館、2016 年、pp.59-97（依頼あり）

３）「内村鑑三における預言者研究の特色とその思想史的意義―ロバート・N・ベラーの議論をてがかりに」『人文科学研究　キリスト教と文化』46 号、国際基督教大学キリスト教と文化研究所、2015 年、pp.117-163

４）「明治期・内村鑑三における〈独立・自由・個〉の展開（2）―反・社会観と親・社会主義の様相―」『アジア・キリスト教・多元性』13 号、「アジアと宗教的多元性」研究会、2015 年 3 月、pp.67-85

５）「明治期・内村鑑三における〈独立・自由・個〉の展開（１）」『アジア・キリスト教・多元性』12 号、「アジアと宗教的多元性」研究会、2014 年、pp.39-58

〔学会発表〕（計 9 件）

（学会・シンポジウム）
１）「人間革命とキリスト教―新日本のルネッサンスから宗教改革へ」『第 13 回　南原繁シンポジウム』学士会館、2016 年 11 月

２）「R.ニーバーと南原繁―キリスト教現実主義と自由主義批判」『日本宗教学会　第 75 回学術大会』早稲田大学、2016 年 9 月

３）「戦後思想における内村鑑三―福澤諭吉との比較論をめぐって」『日本思想史学会 2015 年度大会』、早稲田大学、2015 年 10 月

４）「R・ニーバーと内村鑑三―アモス書解釈とその応用をめぐって」『日本宗教学会第 74 回学術大会』、創価大学、2015 年 9 月

５）「明治期・内村鑑三における〈独立・自由・個〉の展開―反・社会観と親・社会主義の様相」、『アジアと宗教的多元性研究会』、京都大学、2015 年 2 月

６）「南原・ニーバー・丸山―平和と正義と強制力との関係をめぐって―」『シンポジウム　南原繁と平和』学士会館、2014 年 11 月

７）「内村鑑三における福澤批判と福澤評価―その総合的理解のために―」『日本思想史学会　2014 年度大会』、愛知学院大学、2014 年 10 月

８）「内村鑑三における二つの価値基準―humanity と divinity をめぐって」芦名定道、岩野祐介、赤江達也、渡部和隆、柴田真希都「内村鑑三における二元論問題再考―矛盾と並存をめぐって」（パネル発表）、『日本宗教学会　第 73 回学術大会』、同志社大学、2014 年 9 月

（招待講演）
１)「内村鑑三の政治・社会思想再考―明治期「共和主義」を中心に」『第 37 回内村鑑三研究会』、『内村鑑三研究』編集委員会主催、目黒区今井館、2015 年 9 月

〔図書〕（計４件）
（単著）

１）明治知識人としての内村鑑三―その批判精神と普遍主義の展開』みすず書房、2016 年

（共著）

１）「キリスト教の教会とその伝道」前田勉ほか（編）『日本思想史事典』丸善出版、2019 年 1 月（予定）

２）「南原繁：人間革命とキリスト教――新日本のルネッサンスから宗教改革へ」南原繁研究会（編）『南原繁と戦後体制構想』横浜大気堂、2017 年 8 月

３）「南原・ニーバー・丸山――平和と正義と強制力との関係をめぐって」南原繁研究会（編）『南原繁と平和』、EDITEX、2015 年、pp.83-100

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
柴田 真希都（Shibata, Makito）
国際基督教大学 付属研究所 元・特別研究員 PD
研究者番号：70722916

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）